

歌集
禪定三昧

柴崎苔園

詩禪一如

禪の境地から人間の生死、万象の生命の不思議を自在に詠嘆する山僧の世界。

俗塵を脱してしばし詩禪一如の世界に浸る閑雅な歌集。



歌集
禪定三昧

柴崎
苔園

一行雲

禪定三昧

一一

尊像微笑

一六

輪廻

二一

禪堂再建

二五

先覺

二八

小町井戸伝説

三二

寺址

三六

浅春

四一

新樹

四七

清閑

五〇

二
流
水

秋趣靜唱

五三

故園變貌

五九

諦觀

六六

寒響

七〇

禪心

七四

群青

八一

華道展

八六

花麗

八九

菖蒲

九二

蟬聲

九七

珍 芸
濁 点
仔 兔
歌 碑
雪 嶺
楮 火
仙 境
林 檣園
洞 窟
氣 性
追 悼片々
手術前後

一〇二
一〇五
一〇八
一一二
一一五
一一九
一二三
一二八
一三二
一三六
一四〇
一四七

歲首
教導
送別
退職
日章旗
祝壽
思索
反論
因緣
用語略註
跋
後記

浜田蝶二郎

一五八
一六三
一六六
一七一
一七四
一七八
一八三
一八六
一九〇
一九五
一九七
二〇二

装幀
麻里
光一

歌集

禪定三昧

柴崎
苔園

一行雲

禪定三昧

人間の真^{まこと}極めむ道心のととのふ打坐にゆらぎはあらず

打坐

註一

生を明らめ死を諦らむる禪門の要^{かなめ}捉へむ行^{ぎやう}つまねばならぬ

木魚響^なる音と秘呪誦む声と和す念々に妄想を脱却し得て

昏鐘のびんびん冷えて禪堂の行に徹せむ心緊まりぬ

おのおのに求道の差あり軽々と論じあふべき事にはあらず

觀じ得て自在なる境展く須叟うつしみ少し浮ける思ひす

鎌倉に栄えたる禪享け継ぎて大徳巧みに俗みちびきし

常凡の生活くらしのなかに生かされてゐる禪の道識るが少なく

解脱にはほど遠く結跏して究め難き禪の真諦を体得せむとす

結跏 註二

尊像微笑

微笑^{みせう}してとろけるやうなみ眼と会ふときのま佛ごころに触れつ

熱海某美術館

いつくしみ溢れてみ眼の可憐なる極みの相すがたか聖徳太子立像

一 仏師鑄たる観音菩薩像 信仰越ゆる慈心あらはす

心願のつぶさに凝れる観音の坐像いかしき美をただよはす

わが坐高と等しきほどなる彌陀像のみ胸まだらに剥ぐる金箔

身構へて浄土に衆生みちびかむ形相ぎやうさういかしく二脇士けふじおはす

脇士 註三

煩惱を断つべく念ずる眸めの奥に形なさざる観音現ず

犯し難く笑みます太子立像にみとれゐて先だつ友に呼ばれぬ

尊像の眸めのかがやきが罪障の深きをまともより内観しるむ

輪
廻

俗に墜ち俗を脱して生死説くうちに禪僧の貌とりもどす

重なりて訃報届きぬたまたまに無常説きたる寒の曇り日

六道ろくだうの輪廻りんね諦めかぬる貌つらなる葬りにきびしく黙す

輪廻

註四

信じてても信じなくても転生のつきまとひるる世は逃れえぬ

死にむかひるる凡俗の行き果てむところ悟らず逝くが多かり

引導を唱へ了りていづれかくならむ思念の消えては現ず

みづからの死顔のぞき得ぬ一期^{いちご}想ふひととき卒塔婆の響^なる

禪堂再建

山林売却金工費に充てて禪堂の成るまでに三十余年を閲す

棟上ぐる槌の音大きくこだまして大氣常より淨く緊しまれる

淨財に購ひたる仏具備はりておのづとみ堂に充つる莊嚴

落慶法要事なく終る万感を辛くも耐へて謝辞結びたり

六百遠年諱修おんねんきして詣る開山の古塔にむす苔ひとしく光る

遠年諱 註五

先
覚

村びとの蒙啓かむと先覚ら「おのごうがく小野郷学」を設くこの僻遠に

学制に先だつ開校　漢籍の素読主にして青年を啓発す

郷学の教場なりしわが禪堂戦禍に焼け失せて面影あらず

教場にかかはる記事を多くしてわが寺史編まむ心はづめる

儒に拠りて教化に努めし先覚の遺せる詩文豊かに雅なる

扁額にしるす「小野郷学」肉太き楷書に力動感のあふるる

育英に励む先覚村に出づ豪農なりき名望ありき

小町井戸伝説

寺有地に湧く小町井戸ゆかり由緒ゆかり古く新編武蔵風土記稿に載れる

小野一族統ぶる武州に下り来て小町籠ると寺伝に記す

洗眼の効ありて小町癒えたと伝ふる湧井いまに涸れざる

薬師の夢醒むる暁まなこ癒え小町京に発つ記事の乏しく

全国に一七〇余伝はる小町像似てゐてすべては同じからざる

京都府中郡大宮町の建立する「小町の舎^{いへ}」わが寺伝を展示せる

真実はいづこに潜むわが寺伝「丹後史伝」のなかにも生くる

寺
址

廃れたる礎石に触れて聖武帝のみ佛ごころに心を寄せつ

相模国分寺址

崇仏の念願に成る国分寺廢れて畑なかに残れる礎石

心願に感應したる証かも幾世撞かれて歪む梵鐘

いづこにて鑄たるか緩く撞く鐘の余韻に生くる遠世がありし

官の寺護り給へる寺僧らの墳はかのあり処を見つめて黙す

他界より寺僧らいかに見るらむか家群の低く墳かこむさま

財と労いかほど費やしたるならむたしかめ難く史ふみ読み返す

墳のうへ流るる雲に夏の翳あはあはありて心展けず

並び建つ家むらのかこむ丘の墳転変を経て史蹟となれる

浅
春

心まで痩せてはならぬと白梅のひと枝活けて明るくをりぬ

同じ向きに梅の咲けひらば良きことのきざす予感に胸もとぬくし

枝と枝のあはひに風のまつはりて寒の光をもてあそびるる

蕾まだらにふふむひと枝曇天に抽んずる梅の存在感あり

庭石のそびらを占めていのち噴く紅梅の彩^{いろ}何より生れし

白梅に隣れる紅梅傾きて影の清楚に屈曲しをり

梅白く乱れて散れるひとところ春には早き土の匂ひす

花首の傾ぐ水仙一輪に冴えかへる雨のゆふべおとろふ

水仙の蒼き切り口不揃ひに握りゐる掌の泥だらけなる

相寄りて川面を流るる白梅の落花それぞれに余光乗せたる

わが膝の痛みにおかまひなく歩む鳩と春浅き景のなかに位置占む

新
樹

満山の芽木のいろどり言ひ難し心のいろよりいかほど淨き

芽木の林抜け来て心洗はるる思ひに見返す啓示の如く

びつたりと歩調揃へて若きらの歩みゆく徑すでに下萌ゆ

わが起床うながす如く山鳩は芽吹く下枝にふたたびを啼く

いのち匂ふ芽吹き樹の枝交はりて曳く影地つちにをさなく揺るる

清
閑

清閑に生きむうつしみ木洩れ陽のゆらぎのなかに命を想ふ

昼なごむ秋の陽なかにうつつなく仏陀のさまに眼つむれる

風鐸のをりをりうつろに響^なるかなた茜浄土に執着深く

晩秋おその冷えきはまりて玻璃窓のなかばは異なる曇りをたもつ

心とぎす暮秋そらの天の明暗をたしかに分けてレンズ捉ふる

秋趣静唱

昆虫のいのち灯に断つ季ときすぎて新涼の宵をつれづれにゐる

乙女座のもとに充ちたる新涼のしとねにふんわり眠りてゐたし

血圧の高きを恐れゐる初秋しゅうしゅう落暉の真紅うつくしすぎる

花密に匂ふ木犀ひと枝をひとりが乞へばみなが欲しがる

夕晴れて斜陽のなかなる木犀の落花は金の破片の如く

秋天に匂ひて映ゆる銀杏葉のすでに葉さきの翳り帯びたる

白菊に触れては蜜を吸ひるたる揚羽舞ひ戻り来て何に執する

含羞の貌をさらしてほととぎす斜陽のなかの風をとみなふ

秋惜しむ心あるごと茶の花の多くうつむき加減に匂ふ

曝されて滅びにむかふおそ晩秋の屈託あらぬ色に昏れゆく

樹の影と心の翳とかさなりて秋尽くる縁えにし絶えむ思ひす

故園變貌

住み馴れたる谿の水田埋められて度し難き^{いかり}忿何に遣るべき

開発といふ美名が人を貶しめて環境保つ論容れられず

埋め立ての醜さ極まるこの谿に心やすめむ風趣奪とられつ

戦のさなか食の乏しさ補はむとともに田作りせし農の今亡く

遠つ祖拓く水漬田埋められて故郷ふるさとのいのちずたずたとなる

競ひては田螺拾ひし杳き日よズボン汚して小言いはれし

泥鰌掬ひしたる思ひ出語る農稲田失せたる嘆きをまじふ

地の靈つちひと日掬シヨベルひし掘削機カ谿深く氷雨に濡るる貌向く

水漬田に趣添へるし白鷺の見られずなりてすでに幾月

怒れ怒れ自然よ怒れ限りあるこの自然壊すものの奢りを

変貌の谿になじめぬゆるゑを言ふ農とひとしき嘆きは言はず

おのが声常より重く噎れたるをテレビに聴きていたくはがゆく

自然環境護るべき旨慎ましく語りて出演の責を果たしつ

出演

註六

諦
觀

空^{くう}に歸せむいのちぼろぼろ一齊に枯葉散る音落葉響^なる音

かりそめの世を生き彼岸に到らむ身もともと虚し無一物なる

死に對きて宙を散りくるもみぢ葉に等しからざる美しさあり

転びゆく落葉ふたび掃き寄する徒勞の影の冷ゆる虚しさ

土に還るいのちを諦観するさまに散りくるもみぢのひと色ならぬ

枯芝に降る雨落葉に響る雨の韻哀歎の落差ともなふ

沈黙の落葉に滅びの光を見ておとろへそめし身をかへりみる

寒
響

篁の響る音^な谿の響る音の混沌として一様ならず

谿深く響る寒の風篋の曇りを揉みて日ぐれ渦まく

定まらず風の揉みゐる篋の加速度増して葉さきを乱す

枯草いろに干^ひ反^ぞる竹落葉踏む音の痛みともなふ波動となりぬ

冷えつゝのる寒の残照篁の揉まるる葉むれに分断されつ

風まつたく絶えて篁「時」断つかと瞬時に思ふ薄明を見し

不揃ひにもろ葉のゆらぐ風のなかしぐれ色して竹林昏れぬ

禪
心

難解の詩篇よみ得て凡俗と異なる父の禪心を見し

散佚^{さんいつ}の多きを恐れて蒐めたる先住の遺稿編まねばならぬ

老いの憂さ慰むるといふ詩序の簡雅に富みて技巧もちひず

禪僧の父生きてをり詩ごころの奔放自在なる遺篇三百

父の清書せる遺稿「山中集」皇太子殿下成婚の作に筆絶つ

推敲をかさねて訂す筆の痕あらはなる詩篇読みかへしたり

思ひ出のなかに生きゐる父の貌遺篇に偲ぶ父とかはらず



二
流
水

群
青

地に浅くすがり着きゐる杉苔の群青ゆらぐ木洩れ陽のなか

誦^ず經する音律沁みるむ杉苔の濃淡ゆれてなだらかならず

光る苔ひからぬ苔の密ならぬひとところ冷えてまだらに傾ぐ

それぞれに風趣をかもす庭石の遠くより近くにつらなり並ぶ

庭石のうへを舞ひゐる蜻蛉あり止まらむとして秋を光らす

夕つ陽をまともに捉へて杉苔の彩より鈍し蕚の色は

晴るる貌曇る貌もつ庭石に對ひて黙す心虚ならず

閑寂の心のなかより発つ風の秋を響^ならして淀みのあらぬ

秘史に富む寺の杉苔どこからも見えていのちの彩^{いろ}を噴きたる

華道展

水盤の色とところと融けあへるさまに活けらるる花芳ばしく

近寄れば近寄るほどに菜の花の甘くただよふ会場に来つ

花と語るかのやうに説く君が語尾軽くはづみて明るさ充つる

他流派とさだかに異なる活け方に張りあり力ゆたかに富める

活け方の角度巧みに花生かす君の手腕の凡にあらざる

花
麗

なかばほど咲ひらきて濡るる白百合の午ひるまへよりもさらに傾く

朝顔の花むらさきの単純を見てゐてひらめくものありたり

一掬の涼しさカンナにまつはりて背そびらなる塀たひらに見ゆる

のこぎり草移し植ゑむと思ひきり小^{スコップ}鍬に地球を傷つけてゐつ

満ち咲^{ひら}き花麗をきそふ千百のコスモス透きてひかりを舞はす

菖蒲

ほろほろと葉あひ流るる花の香の捉へ難きものの見ゆる歎び

さながらに女王よそほふ彩りを滑らせてゐる花弁いくひら

さみどりの谿の陽差しの明るくて田の面いちめん菖蒲曼荼羅

鮮烈に菖蒲田匂ふあたりよりやや狭まりて谿静もれる

他愛なき話題の切れ目に観る菖蒲われに對ひて何ささやける

いのちの秘充つる花びらいつぱいに笑まふひかりを捉へたる谿

白きむらさき高さ異なる花びらのゆらぐ波長の多く揃はず

とりどりに彩^{いろ}噴く花びら風の向き変れば同じ向きにさゆらぐ

花びらを舐むるかのやうにそよ風の触れて光と踊りあひるる

蟬
声

さきがけて齒切れよく鳴く蝸の聲の徹りて明けそむる谿

それぞれに音階異なる蟬をりて昼には昼のテンポがありぬ

蟬しぐれ徐々に静まる涼しさの窓より部屋をつき抜けてくる

楠くすのきの樹かげにをりて夕の蟬鳴きやむまでをテープに録す

鳴きやめば他が鳴きつぎて蛹の軀みにそぐはざる音階たもつ

明るきの乏しく鳴きつぐ夕蟬の声のおとろへきがかりとなる

今生を讃へをるにや嘆くにやしらべ豊かに鳴きやまぬ蟬

地の闇に住む期間ときよりも今生のいのち短きを嘆くか蟬の

いのち果てて地つちに仰向く落蟬のわれと大気を共有したる

珍
芸

近寄りて猿の芸技を見る客ら哄笑しては痴呆の貌す

子猿演ずる芸に魅かれて背の赤子泣くを顧りみぬ母情冷たく

人間の演技に劣らぬ寸芸をあつけなく演じて猿無表情

きびきびと演ずる芸のうまさより可憐さのあり猿の愛敬

人間を見くだす貌して小賢しく演ずる猿にゆとりが見えし

濁点

電線を撓めてとまる鴉らの啼かず身じろがず間隔たもつ

つらなりて電線にゐる寒鴉どこからも見えて濁点に似る

不吉なるひびきに日ぐれ啼きやまぬ一鴉に心搔き乱されつ

畦の鴉啼けば残雪まだなる丘に群るが一斉に和す

雪冷えて季ときの風響なるまなかひに一羽うづくまる丘の夕昏れ

仔
兔

みじろがず近く対きゐる仔兔の眸に如何やうに映れる吾か

可憐さの深まるほどに降りて来て陽なかの兎と芝生に遊ぶ

あつけなく兎盗られてしまひたり家を空けたる罪の重かり

足もとに跳ねる態さま顯たつ仔兎を誰が盗みたるや一月十日

幻の兎が見つめゐるといふ愚痴よりはじまる妻のつぶやき

心の灯ぷつつり消えぬ放ち飼ふ兎盜られてふた月経たる

仔兎の跳ねまはりゐし植込の貧寒として動くものなし

歌
碑

慕ひ寄る心ひと筋いしぶみに刻みてふるさとの歌びと顕彰す

塩尻歌碑公園

なが雨の乱れにおのづと傘寄せて歌碑のめぐりを狭くかこみぬ

形と彫りとそれぞれ異なるいしぶみをかこむ林の喬く繁れる^{なり}

録音に聴くいしぶみの歌秋雨の音とあひ和して園暗からず

信州の風土が生める歌びとのいしぶみ林樹とともに生きゐる

雪
嶺

中天を支へてつらなる雪嶺の威にことばなく見あげてをりぬ

嶺迫るいかしさありておのづから嶺の木霊のひそむ気配す

道に沿ふ落葉松林に翠嵐を飽くるまで吸ひて寡黙にをりし

石仏の頭づに小石載るいかならむ善根つめるもののしわざか

寒冷沙一面に張るわさび田を育つるま清水湧く谿深く

南アルプス昏るる晩夏の莊嚴を讃ふる友の頬紅潮す

郭公の短く啼きやむ向つ嶺の紫紺こまやかにみるみる昏れぬ

櫓 火

茅ぶきの茅風雪に耐へて来しいのちを軒に想ひつづけぬ

川崎市民家園

樹皮に葺く屋根に置く石それぞれの冬の貌して陽にまむかへる

土間よりも板の間広き家ぬちを見まはして立つ心親しく

煤けたる柱を撫でておのづから農の生活くらしの素朴に触れし

顔映るほど磨かれし板の間のいづこにあるじ席を占めたる

家ぬちに櫓火くすぶりたる歳月を憶ひて見かへす梁の艶濃く

いく歳月脱穀いとなみたるゆゑに磨滅あらはに歪む石臼

仙境

瀬の音の浄きを聴きて峽ふかくゆくほど晩夏の涼氣充ちたる

存在感あらはに見えて洲のなかの巖いはの重みののしかかりくる

浅流の岐わかれてめぐる洲の巖の面に冷ゆる余光のありし

あやふげに傾く巖を乗り越ゆるときのまいのちちぢむ思ひす

まともより十数米落下して瀧のとどろき天に連なる

仙娥瀧

峽に響^なり宙にとどろき落下する瀧のいづこに太古潜める

白糸の糸^{すぢ}ひからせて落つる瀧おのづと散りて水色に帰す

巖に耳おし当てて聴くせせらぎの涼ともなひて夏逝かむ音

山なみのはるかに昏れて峽くだる左折のたびに車危ふく

林檎園

林檎の香ただよふ園の奥処まで冴えて光のあまねくありぬ

艶良きを氣象よき日に挽ぐといふ園主の頬に余光の映ゆる

紙袋裂くや瞬時に露はれしりんご一顆の紅に魅^{あけ}かれつ

背伸びして撓む下枝の艶良きを挽ぐたび仰ぐ天碧みどり濃く

蝕ばめるりんごいくつか落ちてゐて腐臭激しく淀める樹した

茜いろと頼^みの艶匂ふ樹のもとに寄りてしばらく陶然とをり

選びては挽ぐ頼しづかに持ち替ふるとき芳ばしく匂ひ動きぬ

洞窟

洞窟の小暗きあたり地下水の淡くひかりて奇なるひびきす

秋芳洞

潜むものあらむかと凝らす眼のさきに別なる岩盤裂けて傾く

定まらぬ速さに響^なりゐる地下水の無明の色に太古があらむ

垂れさがる鍾乳石より雫してしびるるほどに冷ゆる足さき

浸蝕の鋭さを見つ時長く乱れて垂るる石筍の尖さき

岩盤の大きく傾ぐ洞口を抜け来て陽なかに動悸してをり

量りえぬ「時」を溜めゐる洞窟の具象の摂理把へ難かり

気
性

たはやすくドラマに涙する妻のわれに譲らぬ気性をもてる

味つけの良きを少しく賞むる卓へだつる妻の瞳が笑みぬ

愛のドラマともに見てゐてさりげなく妻言ふ言葉常と異なる

端坐して秋の雨聴く妻の顔妬心の見えぬ潔き艶帶ぶ

栗の実の大きき小さき選り分くるわが手さばきの妻に劣らず

年金に暮らすふたりの雑煮食むめをと茶碗のしぶ味愛しく

ひとり言ある時つぶやき起ちあがる妻のま顔の疲れを見たり

追悼片々

六十路まで母と在り経し幸ひの刹那に失せて空に帰したり

愚痴言はず人を誹らずおだやかにひと^よ生寡欲をつらぬける母

新しき命の誕生を介添へして助産婦三十余年勤めたる母

月よみの力に引かれたるならむ水に沈むごと^{ひる}午を母逝く

寒の光かげるま昼を母逝きぬ浮世のままにならぬいのちぞ

こと切れし母のまはりに集まりて悼みあふ貌多くうつむく

庭隅に柊の葉のぎざぎざに光るがありて傷心疼く

生と死は独りひとたびだけのものもとより無なる脆き存在

死は生のまつたく尽きむ滅ならず靈視し難き魂^{こん}をまとへば

生と死の脆さに差なきことはりを諦めがたく言ひ張るがをり

合掌をつづくるものと柩とをへだつる窯の扉と重く軋みぬ

骨片となりたる母を拾ひあふ収骨室の空気むなしく

かたち乱れ焼きくづれたる骨片の八十余年母を支へし

手術前後

秋冷ゆる灯に寄りあひて病むものら人間のもつ弱さ吐きあふ

病棟の屋上に見るちぎれ雲懺悔の色に崩れて昏れぬ

病みほそる軀からだ恐れてまなぶたを閉づれば心の闇ひろがれる

息づかひしをるか否かひえびえと死へ傾斜する闇の病室

五十なかばの秋を限りに果てむ身か秘めて短く記す遺言

麻酔醒めぬ生と死危ふき接点にわづらふ腎のひとつ除られつ

仮借なく術後を疼くうつしみをひと夜あたたかくベッドが支ふ

無意識に死の極限を生きぬきて醒むればおほろの視界展けし

耐へがたく疼く宵降る秋の雨涙のやうに視野をよぎりぬ

眠りゐる隣に気兼ねするやうに小刻みに引く境のカーテン

はかなさが意識にありてひと日臥す崖寄りの部屋の存在感重く

並び臥すひとりは寡黙他は多弁介護する家婦また相似たる

飼ひ鳩のなかなる一羽窓に来て啼く明るさに気を取りもどす

ラジオ聴くあり顔剃るがあり朝食までのひととき誰も空費せず

なが病みの愚痴言ふ隣の中年に当り障りなく対応しゐる

「姿を正せ・心正せ」と記したる鏡に対くたび三省しをり

歩行可は青 不可は赤 黄は要注意 患者の名札に添書太く

秋海棠一斉にゆらぐ庭さきの陽なかに退院の一步を印^{しる}す

できるだけ玻璃窓開けて秋ふかき光のなかに予後の身さらす

明け近く冷ゆれば予後をいたはりて胸に毛布を軽く重ぬる

おのづからいのちを思ふ親おもふ予後に氣弱くなりたる吾か

歳
首

つつましく生きむとねがふ歳旦の燭ひとつづつ奥より灯す

息災を念じて誦^ず經する声の透るみ堂の東ややに明けたる

世にうとくなりやすき身をかへりみて年改まる曙光にむかふ

拝殿にむかひて歩みくる音の高き低きありて淨くはづめる

参道に降りゐる鳩を一少女追ひかけ廻す声喊高く

葉牡丹の葉さきにまつはる陽の彩いろが春の暗緑を湛へてをりし

手作りの賀状いちいち読み了へて静かに想ふその人となり

法衣着る吾のテレビに映れりと書き添ふる賀状讀みて笑む妻

あめ色にかをる七草粥食みていのちやしなふ習ひの朝か

教
導

書き写す煩はしさを言ふ生徒たしなめて平静たもち難かりき

虚勢張る生徒に對きて言ひきかす声おのづから荒く大きく

関心の深き話題を採りあげて對へば一齊に瞳^めをかがやかす

納得のゆかぬ貌して立つ生徒諭すさなかを冬の雷鳴る

反撥をつづくる生徒にま向ひて黙したるまま泣くだけ泣かす

送
別

冴えかへる気温のなかに校長の式辞透りて生徒うごかず

卒業のよろこび言ひあふ表情に惜別の翳淡くまとへる

三箇年の業了へて去る若きらに会者定離すと言ひ難かりき

実直に強く生きむと言ひあひて君らが吾をわれ君らを励ます

謝意深く充つる答辞のひと言にこみあぐるもの怵へかねたり

激励し或るは諭してともかくも三年幼くみちびきて来し

価値観のさまざまなる世に堅く持すわが育英の姿勢崩さず

今日かぎりこの校去らむ若きらの展かむ未来恃みてはをり

別れ惜しみ校門に来てふりかへる貌に明るく映ゆる残照

退
職

職退かむ月の俸給仏壇に供へて丹念に封切りひらく

五分咲きの桜に近き校門を少し離れて過ぎゆき思ふ

こころ足る日けだるき日ありき育英に努めて経たる三十有余年

予後の身をかばひて定年にほど遠く退く教職に未練のあらず

残生を歌に生きむと決めてより職退くこの身明るくなりぬ

日章旗

征く日肩に掛けたる日章旗半世紀経て簞笥より発見されつ

生還を期せぬと誓ふ産土の鳥居くぐりてしばらく黙す

激励の寄せ書き短く記されて墨痕凜たりこの日章旗

いくさ敗れ五十余年を生くる幸四恩に謝してなほ余りあり

命運の痛まし哀し戦ひに斃れたる友生くる寄せ書

亡き戦友^{とも}の貌かさなりて五十年経たるサインを見つつうつむく

寄せ書の蝕ばまれたる皺丹念に伸ばして日の丸深く蔵^{しま}ひぬ

祝
寿

すこやかに同胞七名はらから加齡してまさに五百歳の幸を祝ぎあふ

年上ひとり年下みたり健やかにみな職退きて趣味に生きゐる

平均寿命わづかに超えて同年といよいよ余生競ひあふべし

今日よりの長寿願ひて千寿閣に語りあふ話題豊かに尽きず

長命を念ずるところ歌に句に記して色紙交換したる

百歳超え生くる姉妹きょうだい笑む至福範とすべきを姉強調す

長生きを祝ふわが歌妻と甥の評することは短くきびし

み親より享けし命ぞみ親逝きし年まで十年養生すべし

たらちねの写真を飾り生くる幸謝して追慕のこころ新たにす

思
索

思索する日ぐれをまろぶ柿落葉かりかり響^なりて垣に鎮まる

愛想なく応へし昼すぎ常よりもあがる気温をもてあましたり

叱咤する声ひびきくる夕路地をおそふ驟雨に腰まで濡らす

疲れたる貌して歩みくる老いの立ちどまりてはなに考ふる

得たるもの失ひたるもの多からぬ生活くらしを思ふ日齒牙の欠けたり

反論

整然と突きくる論をきりかへす語尾おのづから昂りてゐつ

弱点を突かれてすなほに応じえぬ氣質いまさら改め難し

視点変へ論旨を変へて噛みあはぬ論の是非突き妥協もとめず

ぎりぎりまで追ひつめゆけば反撥のあらむ恐れに言葉濁しつ

けりをつけ得ずとまどひ続ける傍に何のはづみか汗の臭へる

口もとのひりひり乾く灯のもとに弁明する論展望のなく

消極に傾きやすき論調に明かるすぎる灯ひとつを消しぬ

因
縁

教へ子に喜寿祝はれてめぐる旅至福の境につつましくゐる

乾杯の終るときにまゆるゆるときにざす歓喜の胸ふくらます

ねんごろに話題そらさぬ対応が音信欠きたる空白充たす

氣心を知れば知るほど端的にもの言ひあひてわだかまりなく

旧姓を言ひ当つるたび哄笑の湧く宴席のなごやかにして

哀歡をともども語る教へ子ら杳き青春をとりもどしゐつ

クラス会をすでに牛耳る人妻のもつとも気弱き教へ子なりき

半世紀経^たつ教へ子に慕はるるしあはせ思ふ縁^{えにし}を思ふ

情^{じやう}こもる自愛のことばに目頭のおのづと熱くなるを怵^{こら}へず

用語略註

禪定　ゼンジョウ。坐禪のこと。心を統一して一点に集中し静かに物事の真理

を究める修行。おもに禪宗でおこなう修行法の一。

三昧　ザンマイ。精神を整えて安定した状態になること。

註一　打坐　ひたすら坐禪すること。

註二　結跏　ケツカ。結跏趺坐の略。坐禪するときの足の組み方の一。半跏の

対。右足を左腿に、左足を右腿の上部に置き足裏を上に向けて坐ること。

註三　脇士　ケフジ。寺院の本尊を挟んで左右に立つ仏。

註四　輪廻　リンネ。流転のこと。人の靈魂が車輪の廻るように生死をくり返

して六道の世界をめぐるにつづけること。六道とは地獄、餓鬼、畜生、修ろくどう

羅、人間、天上の六つの世界のこと。

註五　遠年諱　オンネンキ。寺院が五十年ごとにおこなう法要儀式。

註六　昭和六十二年十一月二十二日、テレビ東京、当寺に来て「自然の秋」撮

影のとき出演する。

跋

—その禪僧的世界など

浜田蝶二郎

この歌集の著者、柴崎苔園（しばさきたいえん）氏は、禪宗のお寺の住職であり、また長く高校教師の職にあった人であり、私の作歌の友として古くからおつきあいをいただいている方でもある。以下に作品例を挙げながら著者の風貌の一端を描いてみたい。

一九八

観じ得て自在なる境展く須臾うつしみ少し浮ける思ひす

俗に堕ち俗を脱して生死説くうちに禪僧の貌とりもどす

かりそめの世を生き彼岸に到らむ身もともと虚し無一物なる

これら禪僧らしい、きっぱりとした観想の歌が、この歌集の主調音をなしているようである。へうつしみ少し浮ける思ひすは禪の心身脱落感を歌っているのであろう。へ無一物という自覚は仏教の究極の教えが著者のからだと一体になっている証と思われる。

また、この歌集のなかには、

禪僧の父生きてをり詩ころの奔放自在なる遺篇三百

思ひ出のなかに生きゐる父の貌遺篇に偲ぶ父と変はらず

と、漢詩人であった亡き父君を偲ぶ歌があり、ジャンルは違っても、詩藻ゆたかな先代

住職への共感が歌われている。以前に柴崎氏が出した御父君の漢詩集を私もいただいているが、それを出版することが自分の歌集を出すよりも肝要なことだと氏が言っていたことを思い出す。著者は、すぐれた漢詩人であった父君の血を引いているのである。

苔園氏は、東京都町田市小野路町の臨済宗建長寺派萬松寺の住職である。そのお寺に私は行ったことがないが、この歌集の作品に眼を通して見ると、寺院のたたずまいが、おおよそ浮かび出てくる。

つつましく生きむとねがふ歳旦の燭ひとつづつ奥より灯す

心願に感応したる証かも幾世撞かれて歪む梵鐘

木魚響る音と秘呪誦む声と和す念々に妄想を脱却し得て

これらには、著者の日常の起居と繋がっている寺院の風景がある。〈歳旦の燭〉を奥より灯すというのは、寺院本堂のなかでのことであろう。住職にのみ歌える情景である。

ずいぶん長い歌歴の持ち主なのに、これは第一歌集である。昭和四十七年（一九七二年）に、私どもの歌誌「醍醐」の結社賞である松岡貞総賞を受賞し、「醍醐」第三二巻（昭和四十七年）一月号に受賞作品二十首を発表しているが、それから二十四年が経

過している。第一歌集としては遅きに失した感がなくもないが、それだけ作品としては充実度を持っていると言えようか。

集中には、

反撥をつづくる生徒にま向かひて黙したるまま泣くだけ泣かす

などの、高校教師としての歌もある。

五十なかばの秋を限りに果てむ身か秘めて短く記す遺言

並び臥すひとりば寡黙他は多弁 介護の寡婦らまた相似たる

などの大病による入院と、その後の健康上の苦しみも歌われている。そうして、

予後の身をかばひて定年にほど遠く退く教職に未練のあらず

と歌われたような身辺の変化も訪れる。その教え子たちに慕われて、

クラス会をすでに牛耳る人妻のもつとも気弱き教へ子なりき

旧姓を言ひ当つるたび哄笑の湧く宴席のなごやかにして

などの、教師と教え子というえにしの歌も含まれている。更に、かつての大戦に召集されたときの、

激励の寄せ書短く記されて墨痕凜たりこの日章旗

のような歌や、

法衣着る吾のテレビに映れりと書き添ふる賀状読みて笑む妻

ひとり言ある時つぶやき起ちあがる妻のま顔の疲れを見たり

というような、最近の家庭人としての姿までが歌われている。そうして、

死は生のまつたく尽きむ滅ならず靈視し難き魂^{こん}をまとへば

という確たる信念を持つ著者である。禪定を生根幹に据える著者の、その短歌作品の集約が、ともかくこの一巻にまとまったことを喜びたい。

平成八年十月

後記

私の住職している小さな禪寺は、東京都の西南にあたる多摩丘陵の一角に位置している。開発という美名の下に自然破壊の波は、この寺域周辺にも押し寄せているが、それでもまだ昔ながらの緑の環境が僅かに存在している。針葉樹林あり、落葉樹林もあり、四季それぞれの景観は、まことに風趣に富んでいる。

このような環境のなかに生かされて生きるこの身は、おのずから自然に親しみ、自然のいのちに限らない愛着を覚える。あるときは自然のなかにひそむ神靈に謝したい気持ちにもなる。またあるときは、おのれの「いのち」を静観することもある。

幼時よりきびしく親に躰られ、中学時代より大学在学のところには、精神統一や気力充実のために、たびたび坐禪をさせられ、また進んで坐禪に努めたので、坐ることは苦行でなく日常生活を律する心の拠りどころと考えている。いま盛んに言われている坐禪の神髄はたやすくは説き難い。みずから自覚し自分なり

に納得し体得すべき修練である。歌集名はこのような視点から名付けたものである。

旧制の中学校在学のところより国語教師の授業を通じて詩歌に心を引かれはじめた。大学に入学して古典古文を学ぶにおよんで、いよいよ短歌に興味を覚え、卒業後教員として勤務するところより短歌に俳句に強い関心を持ちはじめた。

昭和二十年今次の大戦終結後間もなく歌誌ではアララギに、俳誌ではホトトギスにしばらく入会して投稿を続けていた。その後昭和二十五年知人の紹介により短歌結社醍醐社に入会。松岡貞総主宰に師事することとなり、すでに入会していた歌誌および俳誌からは逐次退会した。

今年は、喜寿を迎えたので、一応今日までの作品を整理し総括するとともに、さらに新しい歌境を開拓したい念願から、思い切って歌集を上梓することに決めた。

師松岡主宰の提唱する「精神主体主義」を奉じて師亡き後も、できる限り師風に随順すべく努めてきた。もともと寡作なので、いざ歌集に載せるとなると、まったく気の引けるような作ばかりで自選するのに、とまどいを感じた。

作品は終戦後から、およそ半世紀にわたるもののなかから選び出したものであるが、必ずしも制作年代順ではない。多少の入れ替えがある。

「いのち」を主眼に、人間の根源にある生と死に焦点を当てて写生、写実を基盤におりおりの感興を詠嘆してきたつもりであるが、かえりみると、その点心もとない。ご高覧賜わり忌憚のないご批判を頂きたいと念じている。

集中には一般には聞き馴れない仏教語、禪語をはじめ、仏像、儀式などに関する語がいくつかふくまれているので巻末に略註を付した。

なおこの歌集の上梓にあたり、ご多忙のなか出版についていろいろとご指導を頂き、さらに跋文まで賜わった醍醐編集委員長浜田蝶二郎氏をはじめ、本阿弥書店の影山一男氏、装幀の麻里光一氏および編集にご協力下された方々のみなみならぬお骨折りに対して心より厚く御礼を申し上げます。

平成九年三月一日

柴崎苔園

著者略歴

本名

柴崎敬巖

1918年

東京都町田市小野路町344番地に出生（大正七年）

1941年

国学院大学付属高等師範部卒業に当り閑院宮賞受賞

”

東京都台東区芝崎町浅草女子商業学校へ奉職。翌年退職

1942年

東京都町田市中町財団法人町田高等女学校（現都立町田

高等学校）へ奉職

1944年

臨時召集により東部第6部隊入隊、年末除隊

1947年

臨済宗建長寺派 萬松寺住職拜命

1950年

短歌結社醍醐社入会

1958年

日本歌人クラブ会員

1972年

松岡貞総賞受賞

1973年

神奈川県相模原市北里大学病院へ入院右腎摘出手術

1974年

東京都立町田高等学校退職

1976年

醍醐社 会計監査、現在に至る

*歌集 ぜんじょうざん まい 禪定三昧 醍醐叢書第135篇

1997年3月10日 初版

定 価 2500円 (本体2427円)

著 者 しばぎたいえん 柴崎苔園

〒195 東京都町田市小野路町344 電話0427-35-2047

発行者 本阿弥秀雄

発行所 ほんあみ 有限会社 本阿弥書店

東京都千代田区神田神保町1-62 平川ビル 〒101

電話 03 (3294) 7068代 振替 00100-5-164430

印 刷 真珠社 製 本 山田製本印刷

©Taien Shibazaki 1997 ISBN4-89373-154-8 (10407)

ISBN4-89373-154-8 C0092 P2500E

定価2500円(本体2427円)

観じ得て自在なる境展く須臾うつしみ少し浮ける思ひす
つつましく生きむとねがふ歳旦の燭ひとつづつ奥より灯す
反撥をつづくる生徒にま向かひて黙したるまま泣くだけ泣かす
法衣着る吾のテレビに映れりと書き添ふる賀状読みて笑む妻
死は生のまつたく尽きむ滅ならず霊視し難き魂をまとへば

贈呈

はじめてこの歌集を上梓致しました

ご高覧賜わりますよう御願ひ申し上げます

柴崎 苔園

